

【漢検漢字文化研究奨励賞】佳作

『安愚楽鍋』における振り仮名の研究

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 博士後期課程2年 石井 久美子

一 はじめに

『牛店雑談安愚楽鍋』は、戯作者仮名垣魯文によって書かれた作品である。明治四（一八七二）～明治五（一八七三）年に刊行され、初編、二編上下、三編上下の全三編からなる。当時、流行の先端にあった牛店が舞台であり、そこに牛鍋を食べに来た客の語りが、全一八話収録されている。日本語学研究においてはその価値を認められてきた資料であり、先行研究は非常に多い。例えば、本稿とも関係の深い、表記や語彙に関する主な研究には、鈴木（一九七二）¹の漢語調査や、飛田（一九七八）²の語種調査、飛田（一九八八）³の漢字表記と仮名表記の割合の調査、久保田（一九九八）⁴の送り仮名の調査、そして、岡本（一九九一）⁵の廢語とカタカナ表記語の調査などがある。先行研究の中で、仮名表記と漢字表記が使い分けられていることは度々指摘されてきたが、仮名と漢字を併記する用法（以後、二重表記と呼ぶ）についての注目度は低い。本稿の目的は、『安愚楽鍋』における振り仮名と漢字の二重表記に注目し、どのような形式的特徴があるか、そして、人物像の形成にどう活かされているのかを明らかにすることである。

『安愚楽鍋』の表記的特徴をより明確にするために、今までにない試みとして、『仮名読新聞』に掲載され、内容や文体が似ているとされる「開化諺競」⁶との比較を行う。

二 研究材料と研究方法

研究材料として、『安愚楽鍋』は、底本に、『国立国語研究所資料集9 牛店雑談安愚楽鍋用語索引』所収の影印「国立国会図書館蔵本」を使用した。この影印を収録したことについて、「索引の本文とする底本を覆刻するにあたり、諸本を比較検討して、揃いで、もっとも初刻に近いと思われる国立国会図書館蔵本を底本に使用した」（二ページ）という記載があり、当時の表記の確認に適切な資料であると判断した。

比較材料に挙げた「開化諺競」は、底本に『復刻 仮名読新聞』（全九巻、明石書店、一九九二）を用いた。そこに収録されている資料は、版の寸法を縮小してはいるものの、「原紙を、そのまま複写した影印複製版」であり、当時読まれていた表記を見ることのできる資料である。

研究方法は以下の通りである。

『安愚楽鍋』は、登場人物の会話部分に焦点を置き、序などは参照することとめた。登場人物は以下の二〇人⁷である。

西洋好・墮落個・鄙武士・野幫間・諸工人・生文人・娼妓・半可・歌妓・文盲⁸・人車・士・町人・商法個・芝居者・藪医生・落語家・茶店女（ころ）・茶店女（ひき）・新聞好

このうち、職業や挿絵からわかるのだが、娼妓・歌妓・茶店女（ころ）・茶店女（ひぎ）は女性である。また、鄙武士・生文人・士・敷医生・新聞好という、漢語率の高い人物五人を、鈴木（一九七二）では「漢語使用層」と呼んでいる。本稿ではこのような性別や「漢語使用層」の枠組みを用いながら考察を行っていく。

『安愚楽鍋』で得た結果は、「開化諺競」と比べる。「開化諺競」は『仮名読新聞』に全一回に渡って連載された戯作である。冒頭に人物説明があり、その後登場人物による語りが載せられている、という各話の体裁が『安愚楽鍋』と共通している。このような類似点がありながら、表記の面ではどのような違いがあるのかを明らかにし、『安愚楽鍋』の振り仮名の特徴を掴む。

語の認定については、『安愚楽鍋』も「開化諺競」も、『国立国語研究所資料集9 牛店雑談安愚楽鍋用語索引』の「凡例」を参照している。ここでは、

漢字とふりがなの関係は、ふりがなを語認定の基準とした。

（一四ページ）

とあり、原則としてはこの方針に従った。ただし、振り仮名と漢字の関係性を考えるため、

ふりがなと漢字が対応しない場合、たとえば「開化文明」（二二一七ウ3）は、「よ」とされているが、振り仮名がこのように句となつていている場合については、本稿では「開化文明」をひとまとまりとして考える独自の基準を設けた。また、漢字にひらがなの振り仮名がつけられているという組み合わせ以外にも、「二重表記されているものに関しては全てを対象とした。以後、例えば、「安愚楽鍋」という語なら、「あぐらなべ」の部分

部分を「振り仮名部分」、「安愚楽鍋」の部分と「本行部分」と呼んで区別する。

三 分析

三一 振り仮名の形式

まず、『安愚楽鍋』の振り仮名の形式的特徴を見ていく。

『安愚楽鍋』の振り仮名は、原則として右振り仮名であるが、例外として以下の三種が見られる。

・ 両振り仮名 例



・ 右振り漢字 例



・ 左振り漢字 例



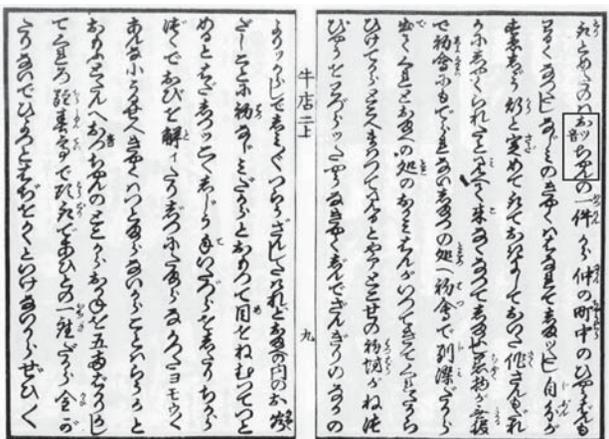
両振り仮名というのは、本行部分に対し、左右両側に振り仮名が振られている表記をいう。右振り仮名はひらがなで音を示し、左振り仮名はカタカナで意味を示しているとい

う特徴がある。人物別に見ると、『安愚楽鍋』では鄙武士のみに用いられている。「誠実賞味いたすでござる」という例を取り上げると、「誠実」という本行部分の漢字と右振り仮名で表された漢語は大げさなものであり、ここでの語の選択としても適切ではない。そこで、左振り仮名で「マコトニ」と本来使われるべき一般的な言い方が示されることで、読者はふさわしい語と意味を知ると同時に、鄙武士が用いている漢語の異様さを感じる事ができる表現となっている。

一方、振り漢字というのは、本行部分のひらがなに対し、右ないし左につけられた漢字のことをいう。先行研究にまとまった指摘がないが、本稿では振り漢字も振り仮名の一つのバリエーションとして扱うこととする。『安愚楽鍋』に登場する振り漢字は、全一四例である。【表1】は、本行部分のひらがなと、それに対応する左右それぞれの振り漢字を示している。表の「本行部分」の欄は振り漢字と対応している部分だけを抜き出している。後続語を合わせると元の一語に還元できる。それぞれの語がどの人物の語りに登場するかは使用者の欄に、またその性別も示している。この表をみると、一四例中一二例が右振り漢字で、残りの二例が左振り漢字である。「おツちゃん（おつちゃん）」という語について、左振り漢字と右振り漢字の両方が見られるため、両者の間に意味的な使い分けがあるとは考えにくい。左振り漢字は例外と考えると、左振り漢字の二例に共通するのは、【図1】のように丁表の一行目に出てくることである。この位置は匡郭や綴じ目との接近により読みにくくなる可能性がある。以上のような状況から、振り漢字の左右の区別は紙面の制約により生じたものと考えられる。

【表1】『安愚楽鍋』の振り漢字

左振り漢字	本行部分	右振り漢字	後続語	使用者	性別
盗賊	どろぼう			ころ	女
音	おツ		ちゃん	娼妓	女
	おつ	音	ちゃん	娼妓	女
	やつ	通	て	娼妓	女
	きんちや	客人		ひき	女
	はやし	廢止		ひき	女
	どんたく	日曜日		歌妓	女
	こつ	凝	て	芝居者	男
	わき	他	町	芝居者	男
	ねへ	下女	さん	芝居者	男
	こねへだ	此間		芝居者	男
	あんねへ	女		諸工人	男
	なか	吉原		墮落個	男
	ふとつ	肥	た	半可	男



【図1】『安愚楽鍋』の左振り漢字

【表1】の話者に注目すると、「漢語使用層」は見当たらず、全一四例中半分が女性である。女性は仮名表記の割合が高いことが特徴的だが、それゆえに語句の切れ目がわか

りにくく、意味が取りにくい。振り漢字を用いると、漢字を本行部分ではなく振り仮名部分に用いるため字が小さく目立たず、視覚的な印象がひらがなに集中する。同時に漢字によって意味が取りやすくなるという効果がある。

ここまで両振り仮名や振り漢字にも注目し、振り仮名の形式を見てきたが、『安愚楽鍋』には、振り仮名と同時に考えるべき表記が登場している。それは、「交ぜ書き」と「部分ルビ」である。

「交ぜ書き」とは、語を漢字と仮名とを交ぜて書くことである。傾向として、画数の多い漢字が開かれている。具体例を挙げると、

げい人 なまけ者 道くわん山 口ばしツた

などがあり、三一八例が見られた。それぞれの人物ごとに交ぜ書きの延べ語数を示したのが【表2】である。各話の長さが違うため、単純に数字を比較することはできないが、網掛けで示した女性（歌妓、娼妓、ころ、ひき）は交ぜ書きが多く、※印で示した「漢語使用層」（藪医生、生文人、新聞好、士、鄙武士）には少ないという傾向がある。武士階級や新しもの好きの人物には少ない表記であり、女性や教養のないように描かれている人物には多く用いられている表記だといえる。

【表2】『安愚楽鍋』の交ぜ書き

人物	交ぜ書き
半可	35
歌妓	33
娼妓	25
文盲	23
落語家	23
人車	22
墮落個	19
諸工人	19
ころ	18
芝居者	15
※藪医生	14
ひき	12
※生文人	11
野幫間	10
町人	10
商法個	9
※新聞好	7
西洋好	5
※士	5
※鄙武士	3
計	318

一方、「部分ルビ」とは、本行部分の漢字の一部にだけ振り仮名が施されているものことである。傾向として、画数の少ない漢字には振り仮名が施されていない。全部で九九例が確認されたが、その一部を挙げる。

- ・固有名詞……………諏訪町 小林平八郎
- ・数字を含む語……………十八番 日本一
- ・字音……………異人館 餓死する
- ・字訓……………持上て 大通り

「数字を含む語」では数字に振り仮名が振られない。その例は三四例に上った。数字は、数量を表す意味の場合だけでなく、「一覽」のような例も見られた。

次に多く見られた固有名詞は人名、地名、店名など一七例があった。人名は八例あり、「房八」のような数字部分に振り仮名のない例が見られた。地名は八例で、そのうち「町」がつくものが七例であった。「馬喰町」のように「ちょう」と訓むと考えられる例と、「至町」のように「まち」と訓むと考えられる例の両方が見られた。店名は「伊勢六」の一例で、人名にもあったような数字に振り仮名のない例であった。

部分ルビは、人物別に見ると、娼妓、ころ、ひきなどの女性にはほとんど用いられていない一方で、藪医生に二五例と特に多く見られる。藪医生は、部分ルビだけでなく、

漢字のみの表記も数多く併存しており、字音の「名目」「壽命」、字訓の「持前」「若イ者」、固有名詞の「兩國」、数字を含む「二合」などが見られる。部分ルビを用いると、振り仮名部分に小書きされるひらがなの量が減り、全体的な印象を漢字に集中させることができる。藪医生は、中国の医書である「傷寒論」の「国字解もわかりかねる」ような人物でありながら、過剰なまでの漢字表記の印象づけによっていかかわしさが助長されている。こうしたことから、部分ルビは、訓みを示すだけでなく、視覚的な印象を漢字に集中させ、「知識」のある人物を描くのにも役立っているといえる。

三二二 振り仮名の漢字との関係

『安愚楽鍋』の振り仮名のうち、音読みや訓読み、熟字訓やそれに準じるような、漢字の訓み方を示す例は八七％見られる。残りの一三％は、振り仮名部分と本行部分の訓みが一致していないものである。それは、次のような例である。

- ・ あて字 振り仮名が本文…混雑煮 騰貴 彼楼
- ・ 音訛・標準語外の音…風俗 外聞 女郎衆 人
- ・ 外来語 翻訳…傳信機
- 音借…羅紗

人物別に見ると、漢語使用層のうちの三人（生文人、新聞好、藪医生）は、振り仮名の用法として漢字の訓み方を示す割合が九〇％を超えており、非常に高い割合となっている。これに対して振り仮名部分と本行部分の訓みが一致しないものの割合は、人物によって二〇～二九％の開きがある。

人物像と関係するという観点で考えると、「あて字」の中に、「藝妓」のような集団語もみられるが、問題としたのは「音訛・標準語外の音」を示す振り仮名である。「音訛・標準語外の音」を示す振り仮名とは、「がいぶん（外聞）」が「げへぶん」となるような音訛や、「ひと（人）」を「しと」というような標準語外の音を示す振り仮名のことである。音訛については、古田（一九七七a）、古田（一九七七b）¹⁰で、振り仮名に限らず、「原形」と「訛形」の比較が既に行われているが、本稿では、表記形式を振り仮名に限り、標準語外の音を示すものを加えて調査を行った。

「音訛・標準語外の音」を示す振り仮名について、その出現頻度の高い人物は諸工人、人車、文盲、芝居者である。それらの人物が語る各話の振り仮名全体における音訛・標準語外の音の割合を【表3】にまとめた。上位に挙がっているのは、男性で、身分の低い者や教養のないように描かれている人物だとわかる。特に、音訛についてはその傾向が著しい。例えば、【表3】でも割合の多かった諸工人では、「附合」「処へ」「杯」「婦ヘツて」などの例が見られる。一方、女性の登場人物の語りには音訛を示す振り仮名は見られず、「人」や「人力車」のような標準語外の音を示す振り仮名が見られた。

【表3】『安愚楽鍋』の音訛・標準語外の音の上位使用者

諸工人	18%
人車	9%
文盲	5%
芝居者	5%

このように、振り仮名は、漢字との二重表記であることによって、漢字の訓み方を示すだけでなく、外来語や集団語などさまざまな語を示すことができる。『安愚楽鍋』では、中でも「音訛・標準語外の音」

を示す振り仮名が、男性で身分の低い者や教養のない者を描くためのレトリックとして用いられていることがわかった。

三―三 振り仮名という二重表記の活用

ここまで『安愚楽鍋』の振り仮名を形式や漢字との関係から考察することで、登場人物に合わせた使い分けがあることがはっきりしてきた。ここでは、漢字と仮名を組み合わせて使われるという二重表記の利点を活かした使い分けの具体例を二つ挙げる。

一つ目は、「牛」の訓み分けである。『安愚楽鍋』の中に登場する訓み方としては、「ぎう」「うし」の二種類がある。両方とも音読み、訓読み通りであり、単体で見るとこれといった特徴はないが、使用人物に焦点をあてると、【表4】のようになる。ここでは、「牛」

【表4】『安愚楽鍋』の「牛」の訓み分け

うし	ぎう	両方 落語家
歌妓	牛	
娼妓	西洋好	
ころ	野幫間	
ひき		
士		
芝居者		
商法個		
半可		

を「うし」と「ぎう」のどちらで訓んでいるかで使用者ⁱⁱを分類している。この表から、女性全員（歌妓、娼妓、ころ、ひき）が「うし」を用いていることがわかる。男性は、「うし」も「ぎう」も使用者があり、落語家のように両方を使う人物もいる。この結果から、男女の使い分けという視点で考えると、女性には漢語より和語の振り仮名が選択されているという状況が把握できる。

二つ目は、「なか」という語を「吉原」の意味で使っている例についてである。『安愚楽鍋』の中には全部で六例見られる。その使用者を次の二つのグループに分ける。

A 遊郭関係者：野幫間、歌妓、茶店女（ひき）

B 遊郭関係者以外：墮落個、落語家

このグループに沿って用例を確認すると、以下のようになる。

A 遊郭関係者

- ・ なんでも **北里**のお茶屋の妻君か（野幫間）
- ・ わちきなんざア十三のとき **北廓**でひろめをして（歌妓）
- ・ **北廓**へでもはしけてしまはれると勘定すくだはね（ひき）

B 遊郭関係者以外

- ・ ダガノおいらのやうに年びやく年中 **吉原**へ計りはいりこんでみちやア（墮落個）
- ・ かけがへのねへ大楮幣をとうく一枚こすらせられたぜモウく **なか**はこめんく（墮落個）

- ・ それから **吉原**の新席がはねでござへやす（落語家）

このように、「なか」という語に対し、Aの遊郭関係者は、「北里」「北廓」という漢字を使っているが、Bの遊郭関係者以外は「吉原」という漢字を使っている。この「北里（ほくり）」「北廓（ほっかく）」というのは吉原遊郭の異称である。話しことばとして「なか」という語を用いていることは共通しているが、「北里」「北廓」「吉原」という漢字表記を、その人物が吉原に関わる職業に就いている人物かどうかで使い分けられているといえる。職

業上吉原との繋がりが強いと考えられる者は異称での漢字表記を、そうでないものは最もわかりやすい「吉原」の表記を用いる。このように集団語を用いる人物かどうかを漢字で表現し、その人物像を形成するのに役立てているのである。

四 「開化諺競」との比較

『安愚楽鍋』の作者仮名垣魯文は、明治八（一八七五）年一月に創刊された『仮名読新聞』の編集に関わっていた。この『仮名読新聞』は、明治初期の三大小新聞の一つで、表記としては総ルビであるという特徴を持つ。

「開化諺競」は、『仮名読新聞』の第三百四十六号（明治一〇（一八七七）年四月二三日）～第四百四十八号（明治一〇年八月二〇日）に全一一回に渡って連載された。「開化諺競」について、土屋（一九九二）¹²は、「弟子や投書家とともに新たな戯作の試みを紙上で行っていたようだ」とし、

「仮名読新聞」欄に連載された「開化諺競」は、内容も文体も『安愚楽鍋』の続編ともいえるべきものである。これには仮名垣一派に属する有名投書家たちが署名しているが、無署名の回もあり、それは魯文によるものだと推せられる。

と述べている。「開化諺競」の表記を『安愚楽鍋』と比較すると、次のような共通点が見られる。それは、「歸り」「時計」など音読みや訓読み、熟字訓やそれに準じるような、漢字の訓みを示す振り仮名の用法か、それ以外に分けると、その割合が非常に近い点である。『安愚楽鍋』では、漢字の訓みを示す振り仮名が八七％、残りが一三％であったのに対し、「開化諺競」では、漢字の訓みを示す振り仮名が八六％、残りが一四％で非常に近い。

各回ごとに割合を求めると、【表5】¹³のようになる。漢字の訓みを示す振り仮名が九〇％を超えるのは、俳諧の宗匠（第九）、良醫（第七）、法律家（第四）らしくふるまっている人物である。『安愚楽鍋』にも藪医生が登場したが、「開化諺競」でも良医らしく

ふるまう藪医生が取り上げられている。両者はどちらも漢字の訓みを示す割合が九〇％を超えている。『安愚楽鍋』も「開化諺競」も、漢字の訓みを示す振り仮名の割合が高い人物は、「知識」のあるように描かれている。

次に、「開化諺競」と『安愚楽鍋』の相違点を、以下に五つ挙げる。

一つ目に、「開化諺競」は振り仮名の形式が右振り仮名のみだということが挙げられる。『安愚楽鍋』に見られた両振り仮名や右振り漢字、左振り漢字は登場しない。このことから、「開化諺競」は、仮名と漢字の組み合わせ方が、本行部分に漢字、

【表5】「開化諺競」の振り仮名と漢字の関係

	タイトル	訓みを示す	それ以外
第九	擬宗匠俳諧天狗詳	92.5%	7.5%
第七	擬良醫庸土妄誕	92.3%	7.7%
第四	擬法律家代言諺	91.7%	8.3%
第十	擬盛大新聞記者虚	89.7%	10.3%
第一	擬投書家誕	88.5%	11.5%
第三	擬西洋書生誕	86.8%	13.2%
第二	擬大姉藝妓の法螺	85.0%	15.0%
つづき		84.8%	15.2%
第拾	擬全盛空房娼諺	84.6%	15.4%
第六	擬譯知動亂猫鼠言	83.6%	16.4%
第五	擬劇場通半可誕	81.3%	18.8%
第十一	擬賽大通生域虚	80.1%	19.9%

【表6】『安愚楽鍋』のタイトル一覧

編	タイトル
初	せいようずき きょうとり 西洋好の聴取
	なまけもの くるわばなし 墮落個の廓話
	あなかぶし ひつりのみ 鄙武士の獨盃
	の だ い こ びつつか 野村間の詔訣
	しまく にん ちうつばら 諸工人の俠言
二上	なまぶんじん ぐわいばなし 生文人の會談
	おいらん あくものひ 娼妓の密肉食
二下	なまぎやう うまよばなし 半可の江湖談
	げいしや さしきばなし 歌妓の坐敷話
	ものしらす むちやろん 文盲の無益論
三上	じんしや ひまご 人車の引力語
	ふくこ いまやうばなし 覆古の方今話
	あきうど むなかんじやう 商法個の胸會計
三下	しばゐ もの みびいき 芝居者の身蟲貞
	やぶあしや ふようちやう 藪医生の不養生
三下	はなししか かくやをち 落語家の樂屋墮
	ちやみやむすめかしくひ 茶店女の隠食
	しんぶんずき なまなべ 新聞好の生鍋

振り仮名部分にひらがなという一通りであり、人物によって字種の組み合わせ方を変え
るということは行われていないとわかる。

二つ目は、「開化謹競」では、振り仮名の漢字表記と、部分ルビを付した表記の
どちらも数が少なく、それらが使われる場合には、数字を含む表記に集中している点で
ある。一部例外もあるが、「二三日」「二丁目」「七面鳥」「一晩」など、数字を含む語に
そうした振り仮名の省略が集中的に起こっている。『安愚楽鍋』では固有名詞や字音、
字訓などさまざまな場合が見られ、人物を表記的にも描き分けていたのとは状況が異
なっている。「開化謹競」は小新聞の特徴である総ルビを採用しているため、数字を含
む表記以外は、基本的には振り仮名を付けているのである。

三つ目は、「開化謹競」の各回のタイトルが、本行部分の漢字に対し、句や文の振り
仮名を付けた形式になっている点である。【表5】の「開化謹競」のタイトルと、【表
6】の『安愚楽鍋』のタイトルを比較すると、『安愚楽鍋』の助詞「の」は本行部分に
書かれているが、「開化謹競」では一例を除き、「擬宗匠俳諧天狗詐」のように、振り仮
名の方に組み込まれている。これは「開化謹競」のタイトルにのみ見られる特徴であり、
人物説明部分や登場人物の語りの部分では見られない。

四つ目は、「開化謹競」は、「音訛・標準語外の音」を示す振り仮名が少なく、人物像
の形成には用いられていない点である。『安愚楽鍋』では、「音訛・標準語外の音」を示
す振り仮名は、身分が低く教養のないことを表現するのに用いられていたが、「開化謹競」
では全体の〇・三%にとどまっている。『安愚楽鍋』で三%を占めていたことと比べると、
その表現効果は小さいといえる。

五つ目は、「開化謹競」は、外来語の振り仮名が使用者のことばの特徴を表す振り仮
名として使われていることである。外来語の振り仮名は、『安愚楽鍋』には、五例しか
見られない。それに対し、「開化謹競」では二六例見られ、そのうち一二例が西洋書生(第
三)に登場する例である。「葺」のような歴史の古い外来語を除くと、西洋書生(第三)
や法律家(第四)、新聞記者(第十)に多く使われている。このように、教養のあるよ
うにふるまっている人物の語りに散見される。結果として、外来語の振り仮名について
は、「開化謹競」の方が人物の語りの特徴づけに活用していることになっている。

『安愚楽鍋』と「開化謹競」では、共通点として、漢字の訓みを示す振り仮名とそれ
以外の振り仮名の割合が似ていた。相違点としては、総じて『安愚楽鍋』の方が振り仮

名を登場人物の語りを特徴づけるものとして利用しているが、外来語についてはむしろ「開化諺競」が登場人物の語りの書き分けに利用しているということとなった。

このように『安愚楽鍋』と「開化諺競」の振り仮名の表れ方に差が生じた理由の一つは、その印刷と発行形態にあると考えられる。「開化諺競」を掲載している『仮名読新聞』は活字印刷され、毎日発行されており、紙面にも時間にも余裕はない。そのため、紙面全体を通じてほとんど例外なく、本行部分に漢字、振り仮名部分に仮名という組み合わせとなっている。それに対し、『安愚楽鍋』は木板印刷で、冊子の形態をとっており、紙面の制限もないため、使用できる表記形式の選択の幅が広い。こうした状況から、『安愚楽鍋』には、右振り仮名だけでなく、振り漢字の活用やひらがなの多用など、“表現”としてのさまざまな形式が、人物像を作り上げるのに有効な表記として選択されたのである。

五 おわりに

本稿は、明治初年に発行された『安愚楽鍋』を材料に、振り仮名という表記の、作品内における特徴と役割を見てきた。その結果、『安愚楽鍋』の振り仮名は、多様な組み合わせによって、表記と音の両面から語りの特徴を表現していることがわかった。

形式としては、右振り仮名を基本としながら、両振り仮名や振り漢字を用いている。両振り仮名は、右振り仮名と本行部分の漢字で人物の語ることを示し、左振り仮名で一般的なことばや意味を示すことができるため、複数の情報を一度に表示することでその間にあるずれを滑稽さとして表現することができる。一方、振り漢字は視覚的な印象がひらがなに集中するため、女性など文章全体にひらがなが多く用いられた人物の表記として使われている。

音に注目すると、漢字に対し訓み通りではなく、音訛や標準語外の音を示す振り仮名が用いられ、それによって階層の低い男性像が作られていた。

こうした振り仮名の特徴は、『安愚楽鍋』の続編とも言われる、『仮名読新聞』掲載の「開化諺競」との比較でも見られた。『安愚楽鍋』で振り仮名をつけるということは、訓みを示すという基本的な役割を担っていると同時に、漢字と仮名の二重表記にするということに価値が見出されている。あるときは、仮名表記と振り漢字、漢字表記と部分ルビのように視覚的な印象を揃え、仮名表記や漢字表記との関係を連続的にするなど、二重表記の組み合わせ方による視覚的効果の違いに考慮した使い分けが行われる。またあるときは音訛や集団語など一般的な語ではないものを示すために、二重表記が複数の情報を盛り込めるといって活かしている。

このように、『安愚楽鍋』における振り仮名は、訓むための補助的な役割としてだけでなく、多彩な振り仮名の活用により、各人物のことばの特徴を“表現”し、人物像を作り上げる手段としても用いられているのである。

【注】

- 1 鈴木英夫（一九七二）『安愚楽鍋』にみられる漢語とその表記について」共立女子大学短期大学部（文科）『紀要』一五
- 2 飛田良文（一九七八）『明治初期東京人の階層と語種との関係——安愚楽鍋を中心として——』『国立国語研究所報告62 研究報告集1—1』
- 3 飛田良文（一九八八）『安愚楽鍋』の漢字」『漢字講座第9巻 近代文学と漢字』明治書院
- 4 久保田篤（一九九八）『明治初期の送り仮名』『成蹊大学文学部紀要』三三三
- 5 岡本美保（一九九二）『安愚楽鍋』におけることはの様相——廢語と片仮名表記語の面から——熊本女子大学『国文研究』三七
- 6 齋賀秀夫・飛田良文・梶原湜太郎（一九七四）『国立国語研究所資料集9 牛店雑談安愚楽鍋用語索引』
- 7 この二〇人のほかに、牛、馬が登場する「當世牛馬問答」がある。構成や文字の大きさが異なり、ほとんどがひらがなのみで構成されている。
- 8 注1参照。
- 9 古田東朔（一九七七a）『安愚楽鍋』の登場人物とその音訛』『松村明教授還暦記念国語学と国語史』明治書院
- 10 古田東朔（一九七七b）『安愚楽鍋』における登場人物の音訛の度合』東京大学教養学部人文科学科『人文科学科紀要六七 国文学・漢文学Ⅷ』
- 11 「ぎょう」の欄にある「牛」は、三編上の「當世牛馬問答」において馬と会話している、登場人物としての「牛」のこと。
- 12 土屋礼子（一九九二）『復刻『仮名読新聞』解説』『復刻 仮名読新聞1』明石書店、一四
- 13 「擬全盛空房娼謹」は本来「開化謹競」の「第八」であるはずだが、底本での記載が「第拾」となっていたため、それに従った。「つづき」は、「第拾」のつづきとして掲載された分だが、タイトルが示されていないため、【表5】ではタイトルを空欄とした。

付記

本稿は、『国文』第一一八号（お茶の水女子大学国語国文学会、二〇二二年二月発行）三六—四六頁に掲載された論文を再掲載するものである。